
ショボンとブーンの日米空軍物語

白米

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ショボンとブーンの日米空軍物語

【著者名】

白米

【あらすじ】

この物語は架空です。

ショボン（ショボーン）とブーンが日米連合軍に加わり活躍する物語です。

時は朝鮮戦争停戦後。急に北朝鮮、韓国、ソ連、中国が赤軍連合を設立し世界を脅かす存在となつた。
これを聞いたGHOのマッカーサーは日本軍解体を中断し日米連合軍を設立し赤軍連合の共産主義の波を抑えることになつた。

登場人物

(、 、 、) ショボンまたはショボーン

元海軍航空隊隊長。

戦闘機しか乗らない。

(^ ^) ブーン

ショボンと一緒に戦う、ブーン。一応友人といったほうが早い

プロローグ（前書き）

ショボン（しょぼーん）とブーンがプロペラ戦闘機に乗り、日米連合軍に加わり、韓国、北朝鮮、中国、ソ連軍が結成した赤軍連合を阻止する物語です。

プロローグ

時は朝鮮戦争終結

韓国、北朝鮮が停戦を結び戦争は中断された。

その翌日、韓国、中国、ソ連、北朝鮮は軍事同盟とし赤軍連合を結成し大規模な同盟軍を持ち日本に宣戦布告を下した。

GHQのマッカーサーは、日本軍解体を一日中断し赤軍による侵略を阻止するため日米連合軍を結成し、赤軍連合に対する行為を全効力阻止を目標にした。

「ねえ、ブーン」

白いTシャツに日本陸軍のズボンを身に着けた、ショボンが暇そくに横たわっていたブーンに話しかける。

「おつおつ」

「?.どうしたの?ブーン」

「これはすごいよ。日米連合軍を結成した、日本はアメリカは赤軍を抑えるために結成したって書いてあるよ。しかも軍解体は中断だつてお!」

新聞をちゃぶ台に置き、人差し指で大きな記事に指を刺す。目を丸くしたショボンは新聞の記事を読み、

「コレって、僕たちも・・・」

「また戦えるんだお!日本のために!そして、お金も貰えるんだお!戦闘機も少ししか残つて無いけど、GHQの特別命令で、生産が出来るようになつたんだお!」

嬉しそうに、語るブーン。疑問に思つた、ショボンは喜ぶブーンに語りかける

「じゃあ、志願してまた軍人として戻る?」

「それが良いお」

戦争に負けてもブーンの士気は下がらずに居たま。

ショボン一旦外に出てゲタを履きは志願書類を片手にGHQに向かう。

お昼の暑い中、汗だくなつたショボンはGHQで警備している、日本人警官に、

「僕達、志願するのですが、これをマッカーサー殿にお渡しきりませんでしょうか・・」

「おおー、これで1000人目だな

「へつ？」

「戦争に負けても、日本人の士気は何故か以上に上がつてゐるんだよな。まつ、明日ここに来い

「あ、わかりました」

プロローグ（前書き）

一からやつ直しだす。

プロローグ2

青空と太陽が光る、東京の焼け野原ではショボンは汗をたっぷりかきながら、バラック小屋の戸を開き風通しの良い6畳の畳へ座り込む。と、そこには頭に神風と書かれた鉢巻に、茶色い飛行服。下は茶色い飛行ズボンで革製のブーツを身に着けたブーンが鏡の前に立つて服装チェックをしていた。

「それ、日本空軍の奴じや・・・」

「おつおつ、GHOが支給してくれたんだお。コレを着ると一番落ち着くお」

「で、僕のは?」

「ショボーンのは、ここにあるお」

指差したのは、丸いちゃぶ台の上に雑に置かれた茶色い飛行服。護身用の拳銃は黒く塗装され、握る所には赤い日の丸のマークがつた。ガバメントM1911である。

「ひどいなあ」

「まあ、いいじゃないか。アメリカの拳銃を使うなんて初めてだ。ほら、そろそろ行くお」

「え? 明日じや・・・」

「それが、今田になつたんだお。そろそろアメリカさんの迎えが来るお。早く身に着けて」

「あ、うん」

そう言いながら、下のズボンを脱ぎちやぶ台の上にあつた日本空軍の飛行服を30秒で身に付けると、

「hey! you!」

「おつおつ、来た来た」

「それじゃ行こうか」

ショボンはガバメントのマガジンを入れ、セーフティーをONにして支給された黒い革製のブーツを履きバラック小屋前で待機してい

た米軍車両に乗り込んだ

我奇襲に成功せり

ショボン達は名古屋経由、そして飛行機に乗り換え、空母赤城へ到着。今現在地は対馬の軍港。さつき出たばつか。

「ん・・?んー・・・」

うつすら、目を開けるショボン。そこは、ダークグリーンの色をした戦闘機に白の色に田の丸のマークが入った戦闘機に田が入った。

「んあー・・・あ、ここ甲板か。何で・・・」

「おっ、起きた。整列とかどうでも良いから、零戦52型に乗るお

「あ、うん・・・あれ?訓練は?」

「バカダナア、俺んちは元々エースだから訓練なんていらないお」

そういうと、零戦21型に乗り込み整備士に点検を行いシートベルトを締め、

「ほら、ショボンも52型に乗れよ。愛機なんだろ?」

「あ、うん」

52型には黒い包みたいなのが詰まれ、ショボンはそれを見ながらコックピット内部へと移動した。

乗り込むと白い制服姿の整備士が、

「積まれているのは250ポンド爆弾です。もうすぐ発艦時間となりますので」

「燃料タンクは?」

ショボンが言つと、

「大丈夫です。零戦52型は一部改造しましたので距離が増加しました」

「へえー」

そう言つと、前方から次々に戦闘機が爆音を上げ発艦して行く。

そして隣の米軍空母も次々にF6Fが飛び立ち、水平線から顔を出す太陽に向かう。

ショボンも発艦し、元海軍航空隊の部隊に無線を入れ当時の戦争

のように編隊を組んだ。

『この編隊は懐かしいお。』

「うん、久々だね」

会話をしながら、飛行するブーンとショボン。あつという間に韓国の釜山の軍港に上空を飛行。

「敵軍の軍港上空。戦闘機隊、爆撃隊は攻撃態勢に入れ」

ショボンが指揮すると、前方の99式艦上爆撃機が急降下体制に入り、黒い筒を次々に投下していく。

黒い筒は、韓国軍の戦艦に命中すると、

ドゴオオオン！

火柱を上げ、戦艦を大破させた。

「我奇襲に成功せり！」

ブーンが言うと、戦闘も一気に急降下をし軍港のそばの飛行場に対し、赤い塗装に黄色い星のマークの塗装が塗られたMIG1に対し、7.7MM、20MM機銃を一気にぶつ放す。

機首、主翼の銃口から出る弾丸はソ連の戦闘機を次々に撃破していく。

ショボンの機体後方から中規模艦隊が到着。中規模艦隊の駆逐艦の主砲が炎を吹き上げ主砲を海上兵器、地上へと艦砲射撃と次々に行つた。

奇襲攻撃を受けた赤軍連合所属の韓国軍は、一気にMIG1を大量に投入

「よくもやつてくれたニダ！許さないニダ～～～～～」

周波数をキヤッチしたショボンはこれを聞いて、

「プ・・・」

笑う。

『ショボン、MIG1が大量投入されたぞ！爆撃隊がやられないよう叩き潰せ！』

「りよ、了解！爆撃隊長どの！」

ショボンは上を見上げると、太陽が見えないくらいのMIGが大

量に出撃された。

「すごい数だ・・・」

操縦桿を下げ、零戦52型を上昇させ爆撃機護衛と入った。

ソ連のエース

「すごい数だ・・・」

青空を埋め尽くす、MIG 1の大量投入。

『ショボン！後ろに赤軍連合機！』

ショボンはブーンからの無線で、後ろを振り向く。

「つ・・！」

後方には、1機の零戦に対し10機のMIG 1が食らいついてきた。ショボンは操縦桿を上げ、零戦を空高く、上昇した。目に刺さる、光がショボンの眼球に指しかかる。

ショボンは、フラップを下げ、速度も落とし後に張り付いていたMIG 1をガンサイトに納めた。

急なブレーキは出来ず、MIG 1は零戦の射程距離範囲に入ってしまった。

「今だ！」

機銃の引き金を引き、機首、ダークグリーンの主翼から、7・7MM、20MM機銃が放たれた。ショボンは操縦桿を細かく操作し、10機中4機を撃墜。

「戦闘機隊へ、出来る限り爆撃機に近寄らせるな！戦闘部隊はミグを出来るだけ落とすんだ！」

無線を切ると、横切ったMIG 1を追跡。

「なかなかの腕だなあ・・・ソ連軍操縦士かな？」

MIG 1は、右ロール、左ロールへとぴったり張り付くショボンを振りぬけない。

ショボンは、引き金に指をかけ、ガンサイトに入るのを待ち、逃げ回るMIG 1を追いかけ続けた。

「右へ、左へと・・・」

『ショボン、もう良い！そいつを追いかけても意味が無い！大損害を与えたからすぐに空母へ戻れ！』

「爆撃隊長、少し待つてくれ！」

『ショボン、ぶはwwwなにやつてんのww軍事裁判で食らつちまうぞwww』

すぐそばで見ていたブーンが、笑いをこらえずその場で笑つてしまいショボンのコックピット内部に響きこむ

「ブーン、少しば手伝つて・・」

『ショボン、危ない！後ろに張り付いてるぞー振り切るんだ！』

「なつ！」

後ろを振り向くと同時に、MIG-1の主翼から機関銃が放たれ、コックピットのガラスを粉碎して行つた。

コックピットのそこに溜まつた、散らばつた強化ガラスを足で振り避けた。

ズダダダダダダダダ！

『ショボン、空母に帰還せよ。直ちに帰還せよ。従わない場合射殺する』

「これだと、命が危ない・・ブーン、後ろの敵をほどいてくれ！」

『おつおつ、20MMでぶつ飛ばしてやんよ。あれ？いないお』

『ショボーン・・』

ショボンは急降下し、釜山の軍港近くで待機していた空母に帰還した

海戦ブリーフィング（前書き）

感想をお待ちしております。

海戦ブリーフィング

空母に帰還し、次の任務を艦長室で待つこととなつた、ショボンとブーンとほかの隊員

白いひげを生やした中年男が、

「まあそこに座りたまえ。西アフリカの豆を使ったコーヒーを味わいたまえ」

「では、お言葉に甘えて・・ショボン、座るお。コーヒー冷めるおうん。そうしよう」

西洋の木製の椅子に腰をかけ、西アフリカの豆を使ったコーヒーの独特的の香りを楽しむ二人は、コーヒーカップの取っ手に人差し指と親指で持ち上げ口に運び、味見をした。

「ぶはつ！ 苦いっ！」

「ん？俺の口には十分合つお」

「苦いか。ショボン海軍航空隊長殿。君は戦闘機乗りだつたな、今回はいくつ迎撃した？」

ショボンは、

「今回は4～5だつた気がします」

「ほう・・1対5か？」

「そうです。相手は素人でした」

「ふむ・・なるほどな」

艦長は机から離れ、ショボンが座る前に立ち作戦内容を話した。

「では、作戦内容を語つ。今我々がいるのは、対馬の北東に位置する」

艦長は壁に貼り付けられた日本地図に対馬の北東部分に青鉛筆で丸をつけた。

「偵察機が見つけた、敵艦隊を撃破してくれ」

今度は赤い画鋲を日本海にさした。

「この赤は敵でこの青いが描画日本軍。我々だ」

「戦闘機乗りのショボンは、妨害をする敵機を迎撃してくれ
「爆撃はブーンの指示に従え。以上だ。質問はあるか？」

ブーンがすばやく先に手を上げ椅子から立ち上がる。

「Uのコーヒー豆はおやつに入りますか？」

「気に入つたのか。まあ、戦闘中は飲めないからポリポリ食つてろ」
紙袋を投げ渡され、ショボンはそれをキャッチ。早速座り、非常
に苦いコーヒー豆をポリポリ食べた。

「NIGEE WWW」

「以上だ。総員、準備に入れ」

【了解あります】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6067w/>

ショボンとブーンの日米空軍物語

2011年10月8日03時22分発行